

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成三十年十月一日発行(第百二十一卷第十号)

ホトトギス

十月号



風雅の小筥〔十〕

廣 太 郎

この稿を認めているのは、平成三十年五月十七日で、考えてみると、来年の五月はもう平成ではなくなっているのである。そんな事を考えると季節の移り変りの早さを感じてしまう。

五月といえば、季題の上では春から夏へと変わる節目になる。勿論他にも二月、八月、十一月も同じように季節の変わり目で、特に虚子編『新歳時記』、汀子編『ホトトギス新歳時記』では月別で編纂されている関係で、旧暦の立春、立夏、立秋、立冬が新暦では少しずれる事になる。そのずれの問題は今回の話題ではなく、季節の変わり目と季節の使い方について述べてみたいと思うが、私が現在毎日通勤している東京の丸の内というオフィス街では、特に今年気付いたのだが、五月一日の朝、大手会社のサラリーマンは一齐にノーネクタイになったように感じた。所謂クールビズである。それを見て、ある句会での質問を思い出した。「立夏が過ぎたら、春の季題で句を作ったらあかんですか」という質問である。逆のケースではあるが、ある人が四月に蠨螋を実際見てそれを句にした事があつたが、それは絶対にいけないとは言えないであろう。勿論基本的には夏が来ると、確かに夏の心持ちになり、実感として夏を詠むのは当然だが、夏になったら、一齐に春の季題が消え失せる事はなく、反対に前述の蠨螋も立夏を過ぎてから突然生息しだすという事はないのである。虚子が夏の北海道で冬の句を詠んだのは有名な話である。俳句は不自由な文学ではないのである。

句日記 汀子

平成二十九年十一月一日 下朔句会

爽やかに朝帰りして来たりけり
快晴の朝の富嶽や暮の秋
ただ予定過ぎゆく早さ暮の秋
爽やかな日癒え給へ癒えたまへ
人知れず咲き終りぬし女王花

十月二日 ロイヤル吟行会

なつかしきここより秋の山路急
秋の雨止んでぬしかと山路行く
開けごま記憶の扉暮の秋

十月五日 きさらぎ会

新米に心を添へてたまはりし
快晴の旅の日帰り爽やかに
よべの月見しかと問はれぬしことも
はじまりし治療に祈り秋惜む

十月七日 芦屋ホトギス会

並べ見て庭の通草の小ささよ
月の雨とて早々と寝ることに
見る積りしてゐて忘れ月今宵

十月十日 大阪倶楽部

色鳥に息をひそめてゐる家居
声ばかりして色鳥の所在問ふ
秋風に旅路彩るものとなる
色鳥の声より先に失せにけり
今宵こそ更待月を見るために

十月十日 綿業倶楽部

又同じ枝を渡りて色鳥来
咲けるもの散り急ぐもの秋の野に
さまよひて迷路の如き秋の野に

十月十二日 清交社

秋といふ豊かな心加はりて
肌寒をいよ木の実加へてゆきしか
肌寒に処さねばならぬ旅の朝
表情の肌寒ほぐれ行きにけり

十月十三日 工業倶楽部

鯨鰯ありしことに身に入む朝かな
水加減減らし新米炊き上る
行秋の時間は追はれぬるばかり
考への行きつ戻りつ秋の雨

十月十四日 西の虚子忌

秋冷の山路これより横川径
薄紅葉より濃紅葉へ七曲り
考への行き過ぎ戻る秋山路

十月十四日 工業倶楽部吟行会

比叡の秋訪ひしその後を合流す
露けしや比叡の忌日も修し終へ

十月十六日 淡路島へ投句

流星に明かせし夜空島のもの
ふたたびは望めぬ夜空流れ星
その夜皆ただ流れ星流れ星

十月十七日 有恒俳句会

ふと気づく添水の音でありしこと
雨多き日々行秋の心あり
鳥渡る湖畔にひと日遊びけり
忌日過ぎ身に入む日々の流れゆく
渡り来し鴨に寄り添ふひと日かな

十月十七日 無名会

目で追うて着水したる渡り鳥
若き日の写し絵見つつ身に入みぬ
大琵琶を平にしたる渡り鳥
身ほとりに仕事山積み身に入みぬ
すめらぎの悲話を語りて身に入みぬ
身に入みて仕事のつゞき置くことに

十月十八日 夏潮句会

秋惜む夜は雨になるとの予報
大琵琶に着きしばかりの鴨と見し
秋惜む昔話もひとくさり
西虚子忌過ぎしばかりに集ふ会
新酒ききたる会のことふたみこと

十月十九日 クラブ合同

柿吊るし生誕百五十年祝ふ
鶴の来てゐる庭を見て家居
駐車場空くまで待つも秋の雨
明日は又明日の予定に秋惜む

十月二十一日 悼 大石勲様

台風にさらはれし如近かれしや
十月二十五日 アネモネ句会

友見舞ふ心に秋の深きこと
見舞ひたる別れの笑顔露けしや
秋惜む心に見舞ひ得しことを
十月二十六日 年尾忌

十月二十七日 時雨句会

秋の蝶 年尾の化身忌日寺
末枯の始まき日ほ地に降りて
鳥渡る風強き日は地に降りて

十月二十八日 句会と講演の会

結局は思ひ違ひや秋灯下
又来るといふ颱風に帰路乱れ
みよしの山路に葉掘りしとか
滞在も長くなりたる暮の秋
午後は雨てふそのつもり暮の秋
なつかしき日々ふり返る暮の秋

十月三十日 摩耶山俳句大会

冬近し摩耶山頂の風の音
芒穂を解く山風に誘はれ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年十月一日 青嵐会芦屋例会不在投句

温め酒 齧齧もろともに飲み干せり
瓢の笛二人の不協和音かな
温め酒過去となりゆく昨日かな
瓢の実を拾ひ旅立つ漠かな
心とは温め酒で癒ゆるほど

十月二日 カトリック新聞選者吟
新涼に祝福受ける二人かな

十月五日 蕉心会

名月や言うてしまへば楽やのに
大川をはみ出してゐる鱗雲
鯊の竿三本捌く老二人
紅萩に羽音風音二重奏
秋蝶の舞うて水面を歪ませて
こぼれ萩池騒がせてをりにけり
十六夜に近付いてゆく空の色
バンアレン帯を飲み込込む鱗雲
常緑樹落葉樹草秋惜む
花臭木苞に佳人の手提かな

十月七日 芦屋ホトギス会

居待月今宵ワインを酌む君と
卓上の通草山気を放ちつつ
君居らぬことも一興暮の秋

十月八日 野分会芦屋例会

灘五郷香り放ちて新走
酒蔵の香を纏ひつつ秋祭
齧齧ありてこそ縁を給ふ秋

秋天に吟醸の香の吸はれゆく
十月十日 むさし野吟行会

武道館屋根金風に染まりゆく
大都市の喧騒抜けて小鳥来る

十月十二日 土筆会

足跡を一本遺し案山子逝く
夜は宇宙旅行夢見て立つ案山子
神の手の伸びて草の実生れゆく

十月十四日 西の虚子忌

忌日寺へ霧抜けて霧ぬけて
雲覆ふ富士霧纏ふ伊吹かな
峰寺を霧押し上げてゐる忌日

十月十六日 北國文芸選者吟

新酒の香供へ忌心整へる
十月十六日 朝日カルチャー若草句会

薄紅葉忌日の色として横川
豊年を右に左に九十九折
出来秋を突き抜けてゆく西の旅
薄紅葉虚子に二つの忌日かな

十月十九日 登高会

懐に出来秋 拈げ富士の黙
疎開せし虚子を偲べば蕎麦の秋
豊年を抜けて横川の忌日人

十月二十日 福知山市民俳句大会

列島に出来秋といふ模様替へ
赤い羽根つけて背広を新調す
やや寒に檻のライオン猫と化す

十月二十一日 若水句会

颯風に色を変へゆく城下町
夜長の灯ワインに溶けてゆきにけり

十月二十四日 若水句会

嵐にも齧齧にも負けず秋深し

深秋の列車嵐に戦けり
過疎といふ絆ありけり秋祭

深秋の星へ伸びゆく摩天楼
崩れ築音階奏でたる流れ
秋祭落人の里てふ気品

十月二十五日 目黒学園句会

六甲の稜線 仄と末枯るる
蝦夷といふ日本の要馬肥ゆる
末枯に一山色を整へり

十月二十六日 年尾忌

里山を知り尽したる小鳥かな
小園の末枯といふ気品かな
小鳥来る高層ビルの屋上に

十月二十八日 「凹缸」新年号色紙揮毫

鳩サブレー二百枚提げ年尾忌へ
気品てふ年輪重ね大冬木

十月二十八日 ホトギス社句会

里山は神の領域 葉掘る
晩秋に逝くマラーを愛でし人

十月二十九日 青嵐会東京例会

晩秋の雲引き寄せて電波塔
葉掘る山知り尽す漠かな
年尾忌の縁繋ぎて築後より

十月二十九日 野分会東京例会

晩秋の嵐を迎へ撃つ都心
タワーの灯冬支度てふ彩りに
颯風に身を細くして電波塔

十月二十九日 野分会東京例会

長き夜を嵐に對峙する泊り
そぞろ寒自分の投句選句して

十月二十九日 野分会東京例会

ハロウインに都心縮んでゆきにけり
ハロウインの果てて野良猫戻る街

雑詠 廣太郎 選

矢車の日本男子の音と聞く 福山 竹下陶子
 天帝を招きやまざる汐まねき 同
 明日桜祭の舞台花吹雪 同
 み吉野の風の淋しさ花のあと 相模原 木村享史
 待つてゐてくれし残花の僅かでも 同
 偲ぶときさくらさびしき色と見る 同
 目を合はすことなき会話梅雨寒し 渋川 木暮陶句郎
 蟻走る蹟くことを恐れずに 同
 青嵐鳥は翼を軋ませて 同
 島ひとつ包み終へたる若葉かな 東京 今井千鶴子
 窓細く開けて夕月夕若葉 同
 大切な思ひ出ひとつ風若葉 同
 一本の花少年の母の曰よ 龍ヶ崎 今橋眞理子
 若葉よりなほ湧き出づる若葉かな 同
 風音に色織り成してゆく若葉 同
 降りて来し香と仰ぎ見て朴の花 熱海 嶋田一步
 朴の花仰ぐ高さに迷ひなく 同
 遠くとも近くとも見え朴の花 同

遠河鹿尼の下山の赤き橋 東京 田丸千種
 禁制の女人へ届く河鹿笛 同
 河鹿川竜を鎮めし昔あり 同
 追悼の臍ならざる鐘を聴く 長岡 安原 葉
 更けてきし吉野湯宿の若葉冷 同
 春の風邪長引き最期かともふと 同
 少年は探険が好き夏の川 神戸 涌羅由美
 夏の川六甲の瀬音を取り戻し 同
 悠然と茜に染まる夏の川 同
 青鷺と同じ水面を見つめ釣る 奈良 古賀しづれ
 あしか涼し空飛ぶやうに水をゆく 同
 不動なる万緑の水河馬の水 同
 万緑の川とし夜も眠らざる 熊本 岩岡中正
 ゆく春の魚の一身透くばかり 同
 生涯をこのバス路線春夕焼 同
 光にも重さのありし白牡丹 神戸 立村霜衣
 夏河原鶴塚橋の下は闇 同
 夏霧ヘルアーを放り込む気合 同
 柳絮追ふ柳絮の雨をさ迷へる 香川 湯川 雅
 飛石に乗れば緑蔭逸れてゆく 同
 青梅や葉影の大きいなる雫 同
 十五人分の重さの柏餅 神戸 山田佳乃
 海神のとりこぼしたる鱈を釣る 同
 苗売のあたりへ人の波動く 同

雑詠句評（九月号より）

春眠の覚めることなく逝かれしと 東京 今井千鶴子

「逝かれしと」と、これは伝聞であつて、直接身近な人の死ではない。しかし、伝聞でさりげなく詠んだところに、かえつてしみじみとした愛惜の思いがある。また、「覚めることなく」に、「覚めてほしかった」という切なる思いがあることもたしかだが、他方、一句の流れるようなしらべに、自然な人の生死への諸念も垣間見える。

さらにまた掲句では、「春眠」の季題がよく生かされている。つまり「春眠」には、「朝寝」の俗を越える天上や来世の不思議があつて、この句にも、故人が「春眠」を「覚めることなく」、現世から来世へとそのまま安らかに逝かれたことへの、安堵と共感のようなものも見えるのである。（中正）

人間生きていると、どうしても肉親をはじめ親しい人との死別というのを経験しなければならないのである。作者の詠まれた時期から想像すると、河野美奇様であろうか。意識が戻られる事無く行かれたと聞か、季題が哀れさを誘うと同時に安らかに逝かれたようにも感じられ、極楽の文学の所以である。（廣太郎）

鳥帰る人は大地に捕はれて 渡川 木暮陶句郎

秋冬に日本に渡つて越冬した渡り鳥も、春になるとまた北方に帰つてゆく。見送られるよりも見送る側が寂しいのは常ながら、空高く遠く飛び去る鳥の群を見送るのは、一抹の寂しさの中にも高揚感が漂う。地上にへばりついて生きるしかない人間のおそらく誰もが抱く、大空をゆく鳥への憧憬が、季題を通して掬い上げられている。（眞理子）

太古の人は空を飛ぶ鳥を見て、自分も空を飛ぶ事に憧れた結果、現在では飛行機等の道具は出来たが、それでも鳥のような自由な飛翔は、現在未だ実現されてはいないだろう。そんな自在に飛べる鳥からすると、人はやはり捕われている、という表現が却つて自然の偉大さを表している。（廣太郎）へ以下略

天地有情

みよし野の春は曙寝てをれず 長岡 安原 葉
 一行とわかれて一人旅遅日 同
 若楓句は平明を良しとする 熊本 岩岡中正
 麦秋を来て最果ての海の色 同
 春隣嫁ぎ行きたる娘の未来 東京 稲畑廣太郎
 雪女郎首都を虜にしてしまふ 同
 接骨木の花を根締に使ひたる 神戸 後藤比奈夫
 チューリップにも定形を外すもの 同
 思ひやる今年も花を見ず病むを 相模原 木村享史
 句敵をうかがひつつや桜餅 同
 夏めくや激昂型の子規の文 神戸 千原叡子
 解決は時と高虚子明易し 同
 飛びすがる草のたわめる秋の蝶 福山 竹下陶子
 客迎ふ篝 火崩れ 十三夜 同
 その頃のことは高原月見草 東京 今井千鶴子
 それぞれにそれぞれの虚子あり涼し 同
 百年の家の匂ひの梅雨に入る 神戸 三村純也
 さざ波となりつつ蛇の泳ぎ去る 同

花に逝く折り目正しき為人 宝塚 水田むつみ
 悼むとき白薔薇のふと翳深し 同
 カーネーション物言はぬひとにも届き 東京 河野昭彦
 賜りしカーネーションの白ばかり 同
 朝寝して旅の名残の中にをり 龍ヶ崎 今橋真理子
 会ふたびに大きくなる子武者人形 同
 星かくすほどでなけれど海隴 東京 山田閨子
 三日目となりし船旅海鹿 同
 幾度も覚めてさめざる朝寝かな 袋井 湖東紀子
 高く漕ぐぶらんこのふと恐くなる 同
 草木の生きくしたる五月かな 芦屋 黒川悦子
 さはさはと渡る新樹の風の中 同
 花屑をもて噴水を被ひたる 吹田 大橋 暁
 白木蓮僅かの風にはらと散り 同
 花蜜柑香りし今朝の山となる 熱海 嶋田一步
 一山に香を溢れしめ花蜜柑 同
 恙の身励ましてゐる菖蒲風呂 西宮 本郷桂子
 粽解く力戻りし指の先 同

心子選